中村俊定文庫
文庫 18
142

西鶴集　乾

表合

目録

一この集つくらんとて浪花のひろまへ
ゆきかよふ難波の西にあり附き
西鶴坊といふ俳諧師一集なりしを
鶴とて西鶴といふ俳諧をこのみ
あり西は此二字よのつねなる事をえみ

[illegible]

一 [illegible]部[illegible]ハ詩集に
作者の名さ[illegible]
さ行結此人の[illegible]

一 この表に神祇あり釈教あり恋[illegible]
[illegible]人名[illegible]ハ一[illegible]の[illegible]
[illegible]

一 此表の句解あ[illegible]一[illegible]ハ半一
いんゝこいうむ[illegible]高面み工夫て

うのほの句解をとゝ[illegible]人の一[illegible]

一 不易　流行　時宜　時節　時分

天相　観相　其人　其場

真草行　曲節地　起定轉

右十八之表目者東[illegible]集
有四格辨而故不[illegible]

この表をよまるものの仰ぎてる節あるべきかくいとまなくとさくく奇とりとなくくこれの
姿をえくいさほるさいあ簑かるーかんを
ろ行りのくちもやなくたるやうるくれハ
人ひとろろかうりてる意さくにそすかれ
やさしけ少ハかさくさ世帝かるさ のをちるてを
この生きすーおかるを

如来坊

文芳 撰

橘津

張波

あるれ花を月おとろさう山鳥　　風布
里を焼畑のあるハ河し　　天窓
笠をるとと笠を赤ぬ人の連をて　　支芳
中有おのはれ汎ハ　　葉蓬
蕾陰場の汁おとめれと来て屑　　之惟
陰れ橘ゥ　　嵐　　伽香
屋根を相はすうりにあるる葉　　舎羅
はれるさ水さてさむおとと芳　　沙長

第一　不昇の真也されてうれしの白めよ月夜
うれしのるやすらへきうんきるて一句と笑えまし
第二　わしうれ紙潟の一句よりて新意をしうん
けさやその比々魅の月うりけちうん日ムつ
あうしうれいと称されてうし

第三　真人也ますらを馬買なすとカラ一百の袋よの
つるめたてうりよるあしたはいかくれとう紙
ますうれうしまさやうるあうんとなりふうしは筆
なよ羽うん

橋摩

姫路

淋しうしちうの苔よれ一字哉　子山
蓼ちうるる蓼の簾めるの　摩風
蓼よ花の湘なこわあうん　文考
夜故ちまへちるふしれか　金東
と農月に樹の家れ高れ時　嵐川
る風れ蓼のひれ山川　路正
風月おる宗祇と仰ら二人連　丈雪
焼火の新しうれあし　蓼庵

第一　不易の真也　林ちりとちりとと吹たてて用せしらず仕ったりと苔よりそとる

第二　其場也　高人也　しるそのいうるかくあさかしき任なりの為て為ぬ義のあるひとりさつまちうようといへとも為らるきの所也　林　おありさ

第三　時也　親也　老也　そのそをあるふとろそのをを所とあるりしく為へれうは意のこそとりとそのそろしあるう為

仝

稽古の為也　文也　如し

元清　洛茨　支考　幸夕　春章　清　茨　等

炎のり去テ　程よ　数

夕就の小家と今を為よなりて

人りとけを籠也　時雷

秀衡ヒラの而て餞とそ汁

山を為しる　秋風の吹

時をあ毎　海也　茶けるの月の就

笠ってを為よ　和ての

第一　流り、真や社の前なる[illegible]
のそ橋の崖ものすごうふ[illegible]
しまいるさをいろこていと[illegible]
服をなさくんや

第二　其日は天おも俳[illegible]
のかりるさらりとハ[illegible]
てきりしまのいさを[illegible]

第三　曲やはこそ[illegible]
タくかのもは咲かり[illegible]
きるを——さそり[illegible]

飯盛山

猿人よ君を問ふ武陵あり　晩翠
別邸の傍に白日はわりぬ　雲巖
敲もてをけそ水鶏の竹木　支考
一里況は是れ[illegible]　梅樓
賈よも[illegible]蝶掃のはは古[illegible]　梅林
[illegible]　食付　鶴白
[illegible]　翠
[illegible]　林
[illegible]　白

第一　[illegible]

第二　[illegible]

第三　[illegible]

後中一

貪欲

第ましく慢をはれぬをそれ　深風
四極の席れ門れ義を　漏角
賞をれる晋の貧をれうをて　支考
秋の子の代れ[illegible]　我々
川ひひお撈の[illegible]　幸吉
しくひびをる[illegible]の菊萩　高雪
貧を[illegible]て猿[illegible]　雲竹
こちの名[illegible]れ沼　青楊

才一　流行の茶也家ありし此会りりよかくらんとてはつられ尚掃時の糧あり座しるとかへみしてゆとより

才二　時節也とらぬさかり盆の後とかくれ無会此両ある照りにさまて糧としのむくらうそのあのさまよかんりや也

才三　其人の一物也下司とも人すれもしさるてしく帷子の表襟の名所みえしとみふ常さ一物かしく又色筋のうしろよりのむかりのそまへ合くるれくゝられ買ひとゝはあつれ門の刻へなるを見つけらく侍そんなくし

仝

白妙や名も涼しきに風車　露堂

木末に蝉のこゑまで　石壇　素秋

旅人はしばし安く淺よるの外て　文考

囲爐裏のさゝに灰焼となる　稚志

着る人の身挿よかりしけふ端　积邑

伯母のむかひに駕籠かり　如草

鳥見て酒のむ月はめでたしよ　蓑里

子猫の母なる廣き新田　和水

廿一　不易の行也立ぬれのたまものあさくさあん
に名し涼しとおりんよせらんそのくらを
さしや

廿二　其場やさうてれ僧のさうさまの様とき
をさきあのせうりるのらよくまくかれて
世の中の仏情をるるや

廿三　其人せ一百ぬさ海さたりきれとるさろ壇
どこうさうりえんあけらに猿人の弟外の
又あるものしきりやはのしりをかへくん
よいるよ外の二らよろ壇よあらりてらんん
ぬけさうよ彩話とりとむまりきう

安義

乗原

蓮池を吟ぬよ風ぬ薫る　一雨
着し一変よ切義の者　時習
わさ海くるる○に変ぬすと　ま芳
海ぬ降日を陽りるる　孤毒
殊らよ聖剣の半ぬまれ　雪飛
れりる○猿の法僧　柳暗
あ〜之と雪ぬ月を鳴く　一故
雲封して弱弾りり　如柳

第一

不易の真也流行は風のと轉倒しとる句より
これをえるのまれ其の蓮の葉のことなるんやの
珍事との面風なるべし

第二

其場也笑と一旁まとひんしめて切捨の
流しおよ嘗なあつめる廣末まさるの
ありさ鈍するへし

第三

其人の一轉也能体のちる花はちとちらく来ん
去りかのれ挟摩の孫ねなるん
さしさしば下の身わりしていりて一句一句の変
まあかれ百孫の尺ところよりまる句ゝ雑語をさる
新ゝるす渡ようとしとあけるぬりしらし

仝

山陰はさゝ前の茶の田植ル　春草
色床ゐそあいね席の涼風　釣舟
かいさまに皆能楷の名をとて　支考
三日月の月は宵乃居　流水
磨して湖水に磯の雄の壺　似水
身は痛も蝉もあかく軍場　樗散
今の世の孫子は指も酒をよく言て　雲膓
もう雑かれそこらんかし紙　嵩吹

第一
不易なりや田植の比さへともよさくらにてその
来ける内この勝しさわとなつかしいらむあらして
わしらん

第二
其場也観音坊れんやまけるよ立家の穂の中から
[illegible]
所の唐と見えるへし

第三
其人也立麻のうちに川和ありて我いり夕食
の新来わりられを轟よりの[illegible]
一[illegible]
かれ[illegible]
にた[illegible]

歌仙

夏湯

来るけや鳥ぬと海の子番船　尚政
日を鷗まで微ぬ夕晴　雲鼓
や行客小し方発の子兎掃もて　支考
懐しらし来萩のれて[illegible]　林角
鳥の白れなれて水れ濁るらん　祖扇
何為よ笑ひて打ね　境界　政
東麿兵のおた戸是れ月見て　角
名をさま海しよ新来ちりたり　扇

[illegible]

[illegible]

[illegible]

豊太

大橋

かりとれ世の仕ゐるやなぎに就えり　柳浦
うそのやうなる夏の時われ　元翠
かの名ゝ名ゝ象わらは月て　支考
所さむしの家をしれ　一徒
さく雲に掛るわらはしん　中嶽
はこうあれよ名ゝ　不帯
地名の京ゝ　西方
きとことし酒よ　十五丸金　桐水
野吹

第一
米高ね所也わのまとしいつまでやに嫁つまぬ
よりも先の今に傳ふ役に稀ふを込めまふれに
ますところへし

第二
いつやなの面を様子にあけぬといふ梅おと
いかゝするへしうりき申ともに所かのく
なほとゝりともの様子とし置め

第三
基陽や曲やまことしらぬ所かのとおもへん
みなみあゝりにと讀たし過ぎのわつまても
おりしゆゝゆゝりし此句を迷いとしくおあ
めく傳わつゝりし　新のとふかれ〳〵月紀れ
おゝひもありへし

豊前
中津

秋きぬの氣色の白し嫁の顔　竿水
冬木の二日月に筆のせむさく　万竹
お座敷を何乃も一汁漬さけて　支考
しら露鶴のとまろ　宗中　吐雲
夕月に梅おりしは今も見ぬ去　竹
萩きさりて花かりれ宿屋　水
梅のかれ葉と買て一本つつ　雲
おりつゝやく人と手と酒の稲粒　雲雅

廿一 本膳のめや開きすい敷の嘆きしまひ婚なさんとおりふて向ふ歓の銘を出すかのあうこまうるゆしさえいふまし

廿二 甚んや婚みてちう来かといふおあ（ゆかり）まれおをすわはおあの象ちいりてみさんとかねての姉など世帳ゆきくらふくそ

廿三 甚場之此之かはおるるき気のつまりていさう言のさくひもきのひきさんとふしとうしら世情也

豊後

日田

大名にも是非なひある暑さかな　宗梅

草の戸の百合伝く山際の夕　梨貞

秋ちる花はちいさん庭の月見哉　文考

淋しい時そ世の中す鉈　芝角

秋水集で年有大根の月も親　恩信

濃の色みめ鶴なりし　幽泉

あら花の人会ちるるやと秋の暮　羽童

蹴のをしと系不のおりひ庭　雲雅

宋一

宋二

宋三

全

私ちゝ赤枝のわちゝやもしれ者　里仙

あらうちん隠のなそゝこ　野和

傾城れ不帯京り廉りなゝて　支考

朝紀るにまいる　朔日　紫道

うゝあるにむらひをにのしら　和雄

俊ゝの情れ武士ふゝのゝらし　河雄

ゝり月の姿とはすれ者ゝと　呼丁

いよ嫁乃絶ゝ　ゝの姿とゝ山風　若芝

廿一　不易なる世界のあらゆるものはことごとくはかなくうつりかわりゆくなり
さゝゑ寂寞たり

廿二　去嬉世世の中しやせおりゝゝうつりてかつ落ちる
の涼しさ春あり秋しら金信世世界の
そゝゝさいそうびすゝん

廿三　其人世界みなしこれ風情ばかりの
形しかあるなしこれ隙体の世帯わすゝん
永宮移家りなとうゝん隙体の二字を
曲りて一結也

豊後　秋殊

跡ひいて勝のひ隙れる夏衣　投錐
はとゝろいけりうゝ之の中し　曲風
貴楽の掃除みゝ時れもわるさて　支考
八百屋さきりあ法師りあ　女郎
不隙ちの百日さゝにくの之る　野水
今分の京ゝを作あやし　可庭
さしと月照われ行の門　長湖
うゝ拭しかそあるとしあれ　蝦夷貞

廿一 不易れめ也本候の里ゟ出ハおまて枝つゝ寄のおゝきたの坂ちすゝんすよ百合れゝ下しきえしれ中ありんすん添と見へむまさゝん西は海家

廿二 夜擬柳とぶ赤の眺めのやまみえ夜さん天お也坂とつんよ百合といふハ澪しまやしれおつゝやゝ也さゝハ日新の香しのしろとするるを

廿三 曲也やゝゝ揚げ除日ゟむまとちまらて香おののいとこや見ん之し打紙むゝしゝゝれと青柳集とつれ落とつふ名月ゟ史まゝらゝ一轉のこゝろし

肥後

八代

鳥子れ踏まれてや桐のむ　理曲

戸ても来ぬ新田の家　麥亭

秋塘よ汲置あを遣まして　支考

七調子風の吹まゝに鳴かて　含蘭

方しと汐合のこゝろ　柳水

あこ舟まゝ河岸を乗る　山卜

名月の花見過とと遊籠て　棣祗

白き雲かけれハ人かへの紅　林木

才一

[illegible]

才二

[illegible]

才三

[illegible]

肥後

作者

[illegible]

幻也
谷吹
支考
魏吟
秦葉
龍子
全瞳
隆吹

第一

不易流行とは月日のかはりゆくこころ、こちゝのかはるものとくるゝふぜいに初発句を作る所

第二

流行とは世々の人の好みかはるものゝ風体をとるくるゝのこゝろ所の風情をすがたにしたがひてさしくこゝろ

第三

不易とは風雅の道にふうけの深きゆえとゝ学るのこゝろなり

あるゝ人ゝ世にはれしびみのゝ移りかはりよりおのゝ自然の変化をいふなり

まことにつくるものゝ世俗のこゝろにしたがひてこゝろ

全

桐の葉は流れんよりまくるゝ

風の音俳こゝろふるのの月

ゝ考ゝ

しとゝの猫ゝ

砌川よりれひろけさるゝ

茅屋の軒かれ松へよはく

鏡ゝ

丁時雨

拠英

洞翠

ゝ考

吹風

路角

成也

水流

[illegible]

[illegible]

[illegible]

肥前

長崎

秋ふかや朝日の出る北星さえ　卯七

はるばるとしらぬ松よりの磯の香　春野

[illegible]　文考

[illegible]　[illegible]

[illegible]　一水

尺寸[illegible]の氣の感のお　閑悦

[illegible]　四青

[illegible]　梅星

[illegible]　子流

歌一

不易也真也行也あれのさやうはあるべき物にて
はなきこゝろの清くとしてはなれの面白
やうなる風情也

歌二

其俳也行脚の四季より
そなふる句なれば
ときこゝろめしより

歌三

曲也和也月より八月とはねこれ星きこゝろおもて
よこゝろ也さ清くとしてまふれなれ人をもたれの
奇なる月を筆にかなるにやしおるの山田とよめれば
四季とこゝろ山の一奥也いつこゝろ月
やうなるものとてかくいひくんなるのつゝひ
清きなるべし

全

炊煙やけむりのそよぐ夕所　鞭風
野路くゝの月よ夜ちゝ　遠雲
清泉此所し板橋の秋の雲　支考
そこゝのあれ味噌つきにける　雪石
雪ちゝ所ゝ所ゝ思ひ出れ気氣　盤谷
みちとこゝてあるふ　元山　水涙
清つあの清樣なのあり清のこゝ　雪彩
此あけゝ月胸のほゝよ　六岳

第一　不易は真也。しかるに此の物語、とかくうれしがるは、おのが主意也

第二　其情也。はるかに行る林にきたる時のわるさい時、ふるつまをつゝみてもの思ひ、さうしをのつゝみんとあり

第三　其情の一物かゝりて、はるかに思ひ出る也

後手をいつかれたるものに
後手をとらるゝ云々

一体和尚

流前

博多

朝霧よりあるをきをもてやれをもて
あるよりの月のおぼれ　原本の
新なるをもてなるゝ思をもて
うるをもてをのよりむをもての金
蒼蒼海よりの日の光をもて
弱弱しきもの花とまるあり
そゝろのよりの軍物あり
因てあるゝふ廣軍の音

舎路
昌尚
支考
雪中
正風
一知
一風
和水

其一
信りの行也ある新よ座揺るとて丸をうんハ秋省の
あらひしあつに行ゑらあの郎く告ウけあてるゑ
むめのしおうきに〇よのきさきせまうらんハ芦すらち
しきとおりひ〇ヤ月ぬ也

其二
甚陽也方を浮さまのわさりとこきけえおわりしれて
有あつきわらんゆ冨よあてさてもひらうしわらん
あやうし気冨のきひよハちあつて御のこら
まの〇ひきらえ汲んとこの是いてさ志あまし

其三
曲也きてにあらあの二あのちきりよ名やさしね
人の赤しれて赤なの月はこなすのあいは
きうの志のみれさぬいと志ろへしたく浮草に
うつゝとおりひよせきらのかたり

伊勢松浦
明とやあかき鏡とありし神まん
うりにくのやと京ハとこうせ

今

秋風の浮れ家ふみをやれの翁　哺扇
花ちるやふ里の　雪解　舎六
翁月よきも家のおれなきせて　支考
深ふとといふ影ふもしいよ　自笑
松の枕れ蝶の松と浅たて　東青
旅をぬ人れ村てらし宗　自来
しけ宿を黄るしゝ〇ら家なり　万俵
夜乃かる秋おとえてぬさうり　也稚

第一　不易流行のものなれば——ことわりつくるまでにくるくる紙をえやうんとしれぬよう接をや

第二　夫俳諧は人間をきそくあんみをきそくあんの肌をきそくあんの中にさめきり

第三　其人の一特やきたにその品の品をるいあこと——れしとおさめうにあ年程の初稿よりちのまのへ

紙布

猫国

一京極のしてあ白し秋の砧尾　東晋

あるよ月のさし　ゆれ　京　有水

年代よりの時分あれて　支考

さひしきの人のたしわりくら　桂舟

脂紙をそ　みの家も柿舟　秋水

いつの月のようる雑　しける金　雲英

照あるる星はは　あるうう　暁茅

ちいさん文の去　こ　こ　元水

第一　不易の真也日々新たにして万古に変ずるの人を待てやあり久しと雖

第二　其情也月の月は義なるべし新たの月新の心なるべし

第三　時と共也所々の流行の変化生の生生の変化

全

三日月と雨降り雲を過て一里　書計

風吹雲を過て稲妻の時雨哉　連山

雲よりも晴れ村の雲食の後　出考

果を待ふるとりいさうし　中野

弱れ迄あけぬ所の人　池主

花見よ雪の中の所　嫁入き　柳川

何時のこれ日和の孫言て　不及

鳴しと夏よ海の気つうし　雷春

第一
風流の真也まよのこおもふこゝろ月の影に感ぜられけるこゝろかなしとこゝろんとおもひなししきらり一時に風流也

第二
其儒也ちよのくちかろとふ黒ちかさおもいて閑のおしきをさため
つらぬ也

第三
其人の一体也黒き時なり此ふ身まどりいらてかなおもひてまてせよろ色のらんなさしめてきこゆらん

跋哉

思添

松雲の事なき松のあらし哉　汐明

何やら鰡飛ぶ白き月　翠吹

比枝を冥迷ひ海見　左考

秋のこ帰の事もし　和花

風さそふ日和あられ候　帆柱

あるみ見もそれちゃ見の意　水瓢

石記かとれさ不も暮さり　一保

とらししもとも事暮此中　柳生

歌一
不易の真そや風情の□さまさしれどもとく
眼の分かれと□ひすまりせんふ市着の市も
風雅の妙情といふ事也

歌二
表情也縮の種うつしれ自ずもあるあるを
縮といふ□へ人と月親みあかれ先人
のしるなせ

歌三
其人風一穂也まるし四季のみな情の林風夕
と見るへし

百人一首
さひしさに宿をたち出てなかむれは
いつこもおなし秋の夕くれ
良暹法師

豊お

小倉

松茸や宵日木にさとつ菊の花　有常

蕣の揃はぞよれ　雪堂　松深

鶏の居なにふつて秋の夜八更　支考

今ては情し枕ぬ絹の下帯　車庸

浪瀧の瀧の男は□さうり　不撃

落はかりさとりあれの鈴　玉龍

鐘の花よあのすきさ九郎云　深

いつとさひしまだ猿丸のゑか　嵐青

[illegible]

第一 [illegible]

第二 [illegible]

第三 [illegible]

長門

下関

新発田の名産の菓子の[illegible]

毎月日のさん[illegible]月

[illegible]の名所を下の関[illegible]て

[illegible]て西[illegible]て[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]門と　[illegible]

うつ[illegible]

[illegible]るの[illegible]

流枝
柳江
支考
芦曲
龍水
嗅雲
[illegible]口
指月

第一　儒りの学の也ありの子よれ学ぶ学ぶ学ぶ
れまらるとれもえうん物の塔と知りて仏奥へ
さもう白也

第二　其傷也ほうの学の塔とつてそ分見さ一のあれ
以ゝ絃へしかれ又人そうんひぬへさ分見れあり
らんへとう

第三　ひ卵の契ゑ也所宜也とうるはよりてひ
ろ物しもりえうりのこの里此寅ゑ物りし
下の関ものえりてそ人この方物ゆてもあり
是かしむへ

表倉稔